

14 世紀末—15 世紀モスクワ・ルーシにおける第二次南スラヴの影響

—ロシアにおける 18 世紀以降の文字改革に関連して—

丸山 由紀子

1 近現代ロシアにおける文字改革

18 世紀以降、ロシアではピョートル 1 世 (在位 1682–1725 年) による「世俗書用活字」гражданский шрифт の制定に始まり、字体ならびにアルファベット組成の変更が複数回行われた。ピョートル 1 世時代の文字改革 (1708 年、1710 年)、科学アカデミーによる 1735 年の改革、そしてソ連成立直後の 1917–18 年の改変である。その際の文字組成の変動を表にまとめると以下の通りになる。

【表 1】18 世紀以降の文字組成の変動

		1708 年	1710 年	1735 年	1917–18 年
行上の記号		×	×	×	×
ψ	пси	×	×	×	×
ѣ	кси	×	○	×	×
ф	ферг	×	○	○	○
ѣ	фита				×
ѣ	ижица	×	○	×	
ω	омега	×	×	×	×
ω	от	×	×	×	×
ї	и				×
и	иже	×	○	○	○
з	зело			×	×
з	земля	×	○	○	○
ѣ	ять				×
ѣ	ук	×	○		
л	малый юс	×	×	×	×

×：廃止、○：復活／存続、空欄：言及なし

すでに 17 世紀中葉から西欧の影響が強まっていたロシアでは、ピョートル 1 世下の 18 世紀はじめ、生活が激変した。加えて書物の需要が多様化し、従来の教会スラヴ語では文章語として対応し切れなくなった。教会スラヴ語の簡略化や、モスクワ方言を元にした官庁語

の適用が試みられたが、それでは不十分であった。いわゆる「国語」が求められるようになり、真の共通語としての標準的なロシア語形成のための諸規範制定に国家権力が介入するようになった。その際、教会スラヴ語が依然として使用していた、当時のロシア語に対して不要な字母を排除し、文字組成の整備をする必要があった。では、なぜこの段階で教会スラヴ語はこれらの余剰な字母を抱えていたのだろうか。ロシア語に生じた音・音韻変化だけでは説明しきれないこの問題に大きく関与するのが、14世紀末から15世紀にモスクワ・ルーシで起こった、いわゆる「第二次南スラヴの影響」である。本稿は日本ではあまりその具体的な内容、歴史的背景が語られることのない「第二次南スラヴの影響」に関して、ロシア教会スラヴ語に生じた使用文字、綴字法の変更と、歴史・時代的背景を紹介し、18世紀以降の文字改革が必要となった経緯を理解するための一助となることを目標とする。

2 第二次南スラヴの影響による使用文字、字体、綴字法の変更

14世紀末から15世紀は、中世ロシア文化、とりわけ書物文化の歴史における重要な転換期である。キエフ・ルーシ時代から培われてきた伝統から脱し、新たなモスクワ・ルーシ時代へと舵を切る移行期にあたり、文献のレパートリー、写本の体裁、書体、字体、綴字法、文体に著しい変化が生じた。こうした変化を総体的に指す用語として、19世紀末に A. И. ソボレフスキイは「第二次南スラヴの影響 *второе южнославянское влияние*」を提唱した。この「第二次南スラヴの影響」という用語には異議が唱えられることもあったが、現在では研究、教育においてすでに一般化した用語と考えると良いだろう。日本においても第二次南スラヴの影響については多少なりとも紹介されているが¹、18世紀以降の文字改革を要するに至った経緯を理解するには不十分と思われる。本稿では M. Г. ガリチェンコ²、B. A. ウスペンスキイ³の研究に基づき、【表1】に掲載した文字類を中心に、この時期のロシア教会スラヴ語に生じた変化について述べる。

2.1 パエロク паерок (Ѧ)の復活

11–12世紀の東スラヴ写本では、弱化母音を表す手段として ѡ, ѣ の代わりに行上の記号の一つであるパエロク паерок (Ѧ)がよく用いられたが、13–14世紀にはほぼ使用されなくなった。一方、南スラヴの写本では保たれていた。

しかし14世紀90年代後半以降、モスクワ・ルーシにおいて第二次南スラヴの影響期の

¹ 小林潔『ロシアの文字の話 ことばをうつしとどめるもの』(ユーラシア・ブックレット№57)、東洋書店、2004年、19頁；中沢敦夫『ロシア古文鑑賞ハンドブック』、群像社、2011年、21–23、271–272頁；佐藤純一『ロシア語史入門』、大学書林、2012年、144–146頁。

² Гальченко М. Г. Второе южнославянское влияние в древнерусской книжности (Графико-орфографические признаки второго южнославянского влияния и хронология их появления в древнерусских рукописях конца XIV – первой половины XV в.) // Книжная культура. Книгописание. Надписи на иконах Древней Руси. Избранные работы. М., 2001. С. 325–382.

³ Успенский Б. А. История русского литературного языка (XI–XVII вв.). С. 304–317.

写本で再びパエロクが用いられるようになった。これは、パエロクが多用された 14 世紀の南スラヴ写本の影響と考えられる。この時期のルーシの筆写者らは主に次のケースで使用した。

- A) 消失した弱化母音に対して (特に子音が三つ以上連続する場合、または同一子音が連続する場合)。в' пѣтъ
- B) 同一の子音字が連続して書かれる場合 (かつてこれらの子音の間に弱化母音があったかは関係ない)。истинно
- C) 前置詞または接頭辞の вѣз, из, вѣз, раз の末尾で。
- D) 子音間における弱化母音 + 流音 (р, л) を東スラヴ語式 (弱化母音 + 流音) に綴る場合、流音のあとで。дол'жно
- E) 語根における、スラヴ語に本来的な子音群に対して (とくに行末で次行にまたがる場合)。

筆写者が皆、上述のすべてのケースでパエロクを使用したわけではなく、多くは A と B、または A~C のケースでのみ使用した。第二次南スラヴの影響期の写本でパエロクの使用頻度は高く、16-17 世紀ルーシの写本や印刷本でも使用され続け、18 世紀以降の教会関係の刊行本でも用いられた。

2.2 アクセント記号の出現

14 世紀末から、それまで東スラヴの写本には無縁であったアクセント記号が用いられるようになった。これは、南スラヴの写本を介してギリシア語写本の特徴であるアクセント記号がルーシに導入されたためと考えられる。第二次南スラヴの影響期に用いられたアクセント記号と主な使用位置は次の通りである。

”	исо	語頭の母音 ѝаце
’	оксия	語中の母音 вѣдоу
˘	вария	語末の母音 вѣста
”	кендема	単音節の単語の母音 сѣ
ˆ	камора	語中または語末の母音 (主に о, ѡ, оу, ю, е, и) нѡ
̑	великий апостроф	1. 感嘆または呼びかけ ѡ дше 2. 接続詞 ѡ
’	апостроф	великий апостроф と同じ

以上が 15 世紀最初の四半世紀以降、中世ロシア語写本で広く用いられたアクセント記号ならびに用法であり、ブルガリアの「タルノヴォ派」の写本に見られるアクセント記号体系と酷似している。ただし、15 世紀の筆写者が皆これらのアクセント記号を用いたわけではなく、人によっては一つ (たいてい кендема)、多くは二つか三つの記号のみ用いた。これは、ルーシにはタルノヴォ派だけではなく、他の南スラヴ写本も持ち込まれ、一口に南ス

ラヴの写本とはいっても、そのアクセント記号の用法が多様であったことが原因と考えられる。さらに、各地の写本作成拠点、また個々の筆写者が各々、アクセント記号の使用法を独自に生み出していた可能性もある。

アクセント記号はあくまでも補助記号に過ぎないので、14世紀以前に形成された綴字法とも衝突せず、非常に採り入れやすかった。はじめは任意の使用だったが、15世紀を通して規範的な書き言葉の要素として、その重要性を増していった。そして、すべての単語へのアクセント記号の付与、その使用規則の遵守が、印刷本において強化されていった。

2.3 母音字の前における ĭ の使用

11–14世紀のルーシの写本では ĭ は主に行末で、またはスペース節約のために使用されていた。一方、14世紀に南スラヴの写本ではギリシア語の影響もあり、[i]に対して子音字の前では **и**、母音字の前では ĭ を綴るという綴字法が形成された。これはルーシの書き手にとっても容易に受容できる単純な規則であり、母音字の前における ĭ の使用 (**страданїа**, **изцѣленїа** など) は第二次南スラヴの影響の非常に早い段階で導入された。この綴り方は単語内で [i] が連続して現れる場合にも適用された。11–14世紀は、はじめに **и**、次に ĭ が綴られていた (**славнїи**) が、第二次南スラヴの影響以降は、はじめに ĭ、次に **и** の綴り方 (**славїи**) が確立していく。

母音の前の [i] に対しては ĭ の文字を使用するという綴りは 15–16 世紀に規範として確立し、16–17 世紀の印刷本、またピョートル大帝期から 1918 年までの刊行物でも遵守された。

2.4 оу と ѳ の使用

11–12世紀の東スラヴ写本では、子音字のあとの [u] は **оу** または **ѳ** の文字で綴られた。やがて 14 世紀中葉までに、語頭または母音字のあとは **оу**、子音字のあとは **ѳ** の第 2 要素と同じ **у** を使用するという綴字法が形成され、**ѳ** は 13–14 世紀前半の文献では事実上消滅していた。しかし 14 世紀末から 15 世紀初頭に、おそらくは南スラヴ写本の影響により、複数の写本で子音字のあとの [u] に対する **оу** または **ѳ** の使用が復活した。こうした綴りは 15 世紀 10 年代には北東ルーシの多くの写本で厳格な規則となり、30 年代にはノヴゴロド、50 年代以降はプスコフの写本に波及していった。やがて **оу** と **ѳ** の使い分けが確立し、16–17 世紀のモスクワの印刷本では常に、**ѳ** は子音字のあと、**оу** は語頭で用いられた。

2.5 у (ижица)

2.4 で言及した **оу** はギリシア語の ου [u] に由来する。その第 2 要素と同じ文字である **у** (ижица) はギリシア文字の υ (ユプシロン) に相当し、本来スラヴ語ではギリシア語からの外来語で υ (ユプシロン) に対して用いられた。やがて東スラヴ写本では本来の機能を失い、**оу** と同じ音価を表すようになり、上述の通り子音字のあとで用いられた。第二次南スラヴ

の影響以降、かつての字体 Υ に対立して **ижица** としては ν の字体が用いられるようになり、もっぱらギリシア語からの借用語で使用された。一方、 Υ は限られた写本において、ときおり [u] に対して用いられるにとどまった。

2.6 \mathfrak{s} の使用

古教会スラヴ語の写本では \mathfrak{s} , \mathfrak{z} は *g の第 2 次および第 3 次口蓋化によって生じた破擦音 [dz] に対して、 \mathfrak{z} は *z に由来する摩擦音 [z] に対して用いられた。しかし東スラヴ語では [dz] は早くにその閉鎖性を失い、[z] に移行した。そのためこの三文字は同じ音価を表すことになり、 \mathfrak{s} , \mathfrak{z} は余剰となった。結果として \mathfrak{s} はもっぱら数字「6」を表す記号として使用され、 \mathfrak{z} はブルガリア語の原典の影響でときおり使用されるにとどまった。

しかし 14 世紀末から、中世ロシアの写本で一部の単語において文字 \mathfrak{s} が使用されはじめ、15 世紀 10 年代からはその頻度が著しく上がった。またこの頃、同じ単語かつ同じ位置で、 \mathfrak{z} も使用され始めた。ただし、 \mathfrak{s} は用いずに \mathfrak{z} を使用するという写本は比較的珍しい。本来は *g に由来する [dz] に対応していた \mathfrak{s} と \mathfrak{z} だが、この時代はそうした本来の位置での使用 (**сѣло**, **зѣло**; **кназь**, **кназъ**; **носѣ**, **нозѣ** など) の他、*z に対して、またときには *s に対しても用いられた。

16 世紀以降、中世ロシア語写本および印刷本において特定の単語 (**свѣрь**, **свѣзда**, **сѣліе**, **слакъ**, **сло**, **сміи**, **сѣло** およびこれらの派生語) は \mathfrak{s} を用いた綴りが定着した。一方、 \mathfrak{z} は使用されなくなった。

2.7 \mathfrak{w} の使用

第二次南スラヴの影響期に、南スラヴ起源の行書体の影響で新しいタイプの行書体を使用されはじめ、それ以前に東スラヴで用いられていた楷書体、古いタイプの行書体は事実上駆逐された。この新しい行書体で、 \mathfrak{w} と幅広の \mathfrak{o} の機能が拡大した。これらの文字は、以前は語頭と母音字のあとでのみ使用されたが、子音字のあとでも用いられるようになった。また、 \mathfrak{w} は前置詞 **ѡ** (**от**) でも用いられた。

16–17 世紀には中世ロシア語の写本および印刷本において、特定の単語と形態素（とくに特定の語尾）では \mathfrak{w} の使用が規範となった。一方、幅広の \mathfrak{o} は 16 世紀のいくつかの写本や印刷本で、子音字のあと、とくにアクセント記号を伴う場合に使用されることがあった。

2.8 Ψ と \mathfrak{z}

古教会スラヴ語では、 Ψ と \mathfrak{z} はもっぱらギリシア語からの借用語で使用された。東スラヴ語に関しては、13 世紀末から 14 世紀に形成された綴字法ではこれらの文字は事実上使用されず、数値を表す際にのみ用いられた (Ψ は「700」、 \mathfrak{z} は「60」)。しかし、第二次南スラヴの影響期にギリシア語からの借用語をギリシア語の綴りに合わせて書く傾向が強まり、 Ψ と \mathfrak{z} が再び用いられるようになった。

以上は第二次南スラヴの影響期に復活、または使用が活発化したものの、18世紀以降の改革により現代のロシア語では失われた文字および記号である。一方、この時期に新たに登場し、今日まで使用されているものもある。

2.9 コンマとセミコロン

11–14世紀の東スラヴ写本では、句読記号は一つの点(現在でいうところのピリオドの形状)のみであった。⁴しかし、第二次南スラヴの影響の最初期に、現在でいうところのコンマ(,)とセミコロン(;)の形状をした記号が南スラヴ文献から導入された。

コンマは分割記号として早くも14世紀末にはいくつかの写本で使用されたが、15世紀はじめ、とくに10年代からはそうした写本が急増した。

一方、セミコロンの使用頻度は遙かに低い。15世紀10年代以降はかなりの数の写本でセミコロンの使用が認められるが、すべてというにはほど遠い。また、セミコロンを使用する筆写者は、一般的にコンマも用いた。14世紀末から15世紀にはセミコロンは疑問符としても、ピリオド、コンマと並んで分割記号としても用いられた。

16世紀以降はロシア語文献においてこれらの句読記号の使用が必須となっていき、印刷本においても同様であった。なお、印刷本ではセミコロンは通常、疑問符として用いられた。

2.10 字体 ѣ の登場

11–14世紀の東スラヴの写本では、古教会スラヴ語と同様に[y]に対して主に ѣ の字体を用いていた。しかし第二次南スラヴの影響期になると ѣ の字体が用いられはじめ、15世紀前半の間に、地域によらず、事実上すべての筆写者がこの字体を用いるようになった。

スラヴの書き手たちは、この文字を ѣ にせよ、ѣ にせよ、弱化母音を表す ѣ または ѣ と ꙗ のダイグラフと認識していたと考えられる。セルビア語では10–11世紀に弱化母音 [i] (ѣ) と [ū] (ѣ) が融合して [ə] になり、写本では文字としては ѣ のみが用いられた。これに伴い、[y]に対して ѣ の字体を使用した。ブルガリア語では ѣ と ѣ、どちらの文字も使用され続け、13世紀は[y]に対してまだ ѣ の字体が保たれていたが、14世紀には ѣ の字体が優勢になった。⁵第二次南スラヴの影響期にモスクワ・ルーシで ѣ の字体が用いられるようになったのは、こうした南スラヴの写本における字体変更の影響と考えられる。この新しい字体は第二次南スラヴの影響期以降もロシア語の写本や印刷本で定着し、現在に至る。

以上、第二次南スラヴの影響によってロシア教会スラヴ語に生じた変化について文字、補助記号を中心に概観した。18世紀以降の文字改革で排除された文字のほとんどは中世ロ

⁴ 行の中間に書かれた(·)が、14世紀末頃になると行の下部、または完全に行の下限に書かれ始めた(·)。

⁵ Щепкин В. Н. Русская палеография. М., 1967. С. 125.

15世紀前半の9名の筆写者（ノヴゴロド、プスコフ、その他北東地域）は第二次南スラヴの特徴にあたる要素は使用していない。その他の筆跡のうち、およそ三分の一は「最小」（1-7）の要素を使用している。約半数の筆写者は「最小」のみ、または「拡張された最小」（「最小」+8-10）を使用している。「最大」（「拡張」+11-14）を使用するのはおよそ四分の一の筆写者であり、また第二次南スラヴの影響期以前はルーシになかったテキストの写本に限られる（主に禁欲主義関連の著作）。古くからルーシで知られているテキストの写本では、通常「最小」または「拡張された最小」（場合によって+ⲡ）の範囲で第二次南スラヴの影響による要素を使用している。

なお、M. A. ガリチェンコは、子音字のあとの[u]に対する文字 **oy** の使用は14世紀中葉の写本にも見られるため、また同位置における **ʸ** は **oy** の等価物と見なせるとし⁷、表に含めていない。

なお、【表2】で挙げた第二次南スラヴの影響による文字類、綴字法、さらに新たな書体はモスクワ・ルーシの全領域で一斉に使用されはじめたわけではない。いち早く取り入れたのは北東ルーシで、モスクワであれば、字体、綴字法に関してはすでに14世紀90年代の写本に見られる。15世紀10-40年代には書体も含め、モスクワの他、トヴェーリ、ロストフ、ペレヤスラヴリ・ザレスキイ、ガーリチ、ヴォログダなどでも使用されるようになった。また、こうした新たな手法を極めて早くに採用し、積極的に使用したのは14世紀に創建された新しい修道院、特に三位一体セルギイ修道院、スパツ・アンドロニコフ修道院、サヴィノ・ストロジェフスキイ修道院、キリロ・ペロゼルスキイ修道院であった。

ノヴゴロドに関しては、14世紀に創建されたリツキイ修道院が早くも14世紀末に第二次南スラヴの影響が見られる写本を制作している。ただし、ノヴゴロド全体で第二次南スラヴの影響に特徴的な書体、字体、綴字法が普及したのは15世紀30年代から、すなわち大主教エフフィミイ2世の時代である。

プスコフについては、現在のところ第二次南スラヴの影響の特徴が見られるもっとも古い写本は1445年成立の祭日経(«Минейя праздничная») (国立歴史博物館、シノド・コレクション、№872) である。

3 第二次南スラヴの影響が発生した背景と要因

モスクワ・ルーシの書物文化は何を介して南スラヴの影響を受けたのだろうか。これまでよく指摘されてきたのは、モスクワ・ルーシにおける南スラヴ出身知識人の活動、モスクワ・ルーシに流入した南スラヴの書物、コンスタンティノーブルおよびアトス山の修道院における東スラヴの修士と南スラヴの修士の共同活動である。ここでは南スラヴ出身者および書物の問題に焦点を当て、「第二次南スラヴの影響」に言及する際に日本ではあまり

⁷ Гальченко М. Г. Там же. С. 376.

顧みられることのなかった事象と研究動向を紹介する。

3.1 南スラヴ出身者

13世紀末に小アジアに成立したオスマン朝は、14世紀中頃、ビザンツ帝国の内紛に乗じてバルカンに進出した。1389年のコソヴォの戦い、1396年のニコポリスの戦い、1444年のヴァルナの戦いなどで勝利をおさめ、1453年にはコンスタンティノープルを陥落させ、ビザンツ帝国を滅亡させた。こうした中、第二次ブルガリア帝国は1393年にオスマン軍の侵攻により首都タルノヴォが陥落し、終焉した。セルビア王国は1459年に最後の要塞スメデレヴォが陥落し、オスマン朝の直轄領になった。

ロシア、ソ連では、オスマン軍がバルカンを席卷し、ブルガリア帝国が陥落したことにより、ブルガリアの知識層が大量にモスクワ・ルーシに移住したことがルーシにおける第二次南スラヴの影響の主たる契機とする見方があった。例えば、Г. Н. Бздорновは次のように指摘している。「文字通りその滅亡前夜まで国威の絶頂にあったセルビアとブルガリアは、短期間で侵略者に飲み込まれ、独立した国家連合としては存在しなくなった。まさにこのときから南スラヴの人々の大量移住が始まった。そして真っ先に逃亡したのは、もちろん、知的労働と概して創作活動に携わる人々である。というのも、トルコに占領されている状況で祖国における彼らの活動があり得なくなっていったからだ。移住の一つの波は西に押し寄せたが、より強大で、歴史が示す通りより実り大きいものとなったもう二つの別の波は、一つはアトス山とコンスタンティノープル、もう一つはロシアへ向かった」。⁸日本でも、当時のバルカン地域の情勢により当地から多くの知識人がモスクワ・ルーシに移住し、第二次南スラヴの影響において主要な役割を担っていたと説明することが多いようである。⁹

しかし、すでに1970年代にI. タレフは、南スラヴから知識人が大挙してモスクワ・ルーシへ移住したというГ. Н. Бздорновの説明は歴史的裏付けがない、根拠を欠いたものと指摘している。「隣の公国、隣の町、彼ら自身の領地にある近隣の修道院、または隣のセルビア王国、またはワラキア公国やモルドヴァ公国へ行くことができるのに、しかもこれらの地では15世紀を通じてスラヴ語文化が栄えていたというのに、なぜ彼らははるばるモスクワやノヴゴロドへ行く必要があったのか。ロシアの研究者らによる、オスマン朝のバルカン地域征服に関連した歴史的出来事の誤った理解、そして南スラヴの人々のロシアへの『大量移住』という神話の創作源は、おそらく、第二次南スラヴの影響のメカニズムに関する従来の考え方の中に見いだされるのであろう。こうした考え方はこの問題を扱った19世紀の文献に現れたのだが、当時、この問題に関する入手可能な実際の情報はほとんどなかつ

⁸ Вздорнов Г. И. Роль славянских монастырских мастерских письма Константинополя и Афона в развитии книгописания и художественного оформления русских рукописей на рубеже XIV – XV вв. // ТОДРЛ. Т. XXIII. 1968. С. 171.

⁹ 小林潔、前掲書、19頁；中沢敦夫、前掲書、23頁；佐藤純一、前掲書、145頁。

た]。¹⁰ B. A. ウスペンスキイは I. タレフの見解を全面的に支持し、オスマン軍の襲来による住民の移住は、ある程度大きな規模で行われたとしても、主にバルカン半島内で行われたと指摘している。またオスマン朝支配下においては文筆活動の継続が不可能であったという見解も根拠がなく、実際はアトス山や他の修道院でも継続され、15 世紀ブルガリア写本も数百点現存している。¹¹ 現在では言語学、文献学の見地から第二次南スラヴの影響を論じる場合、南スラヴからモスクワ・ルーシへの知識人の大量移住に関しては否定的な立場をとるのが一般的である。¹²

また、第二次南スラヴの影響期にロシア教会スラヴ語に生じた変化において南スラヴ出身者が果たした役割も、極めて限定的であったと考えられるようになった。モスクワ・ルーシにおける第二次南スラヴの影響に関与した南スラヴ出身者としてよく挙げられるのは、キエフと全ルーシの府主教キプリアン (1330 頃–1406)、キエフ府主教グリゴリー・ツァムブラク (1364 頃–1419/20)、パホーミイ・ロゴフェート (1484 以降没) である。この中で、モスクワ・ルーシにおける自身の活動により第二次南スラヴの影響を牽引し得たのは府主教キプリアンのみである。

1378 年に府主教アレクシイが死去すると、ロシア、リトアニア、ビザンツにおいて政治および教会における諸事件による混迷状態が 12 年続いた。まさにその渦中に身を置いたキプリアンは数奇な運命をたどることになり、キエフと全ルーシの府主教の在位についても本人の認識通りにはいかなかった。モスクワ大公とキプリアンの認識が一致し、安定してキエフと全ルーシの府主教に在任していた期間としては、1381–82 年、および 1390–1406 年ということになる。これは第二次南スラヴの影響の初期にあたり、南スラヴ出身でタルノヴォ派に属していたキプリアンが教会文化において果たした役割は大きかった。エルサレム修道規則¹³や、13–14 世紀にタルノヴォとアトス山で南スラヴ (特にブルガリア) の修

¹⁰ Talev I. Some Problems of the Second South Slavic Influence in Russia (Slavistische Beiträge, 67). München. 1973. P. 76.

¹¹ Успенский Б. А. История русского литературного языка (XI – XVII вв.). Издание 3-е, исправленное и дополненное. М., 2002. С. 270.

¹² Гальченко М. Г. Там же. С. 327.; Турилов А. А. Восточнославянская книжная культура конца XIV – XV в. и «второе южнославянское влияние» // Slavia Cyrillomethodiana: Источниковедение истории и культуры южных славян и Древней Руси. Межславянские культурные связи эпохи средневековья. М., 2010. С. 237.; Живов В. М. История языка русской письменности. В 2 т. М., 2017. Т. 2. С. 835.

¹³ 『エルサレム修道規則』はルーシにおいてもすでに 14 世紀後半に、おそらく、モスクワ府主教アレクシイの関与のもと、ロシア教会スラヴ語に訳された。しかし、この翻訳はあまり普及しなかった。なお、モスクワ近郊の修道院であっても『エルサレム修道規則』を完全導入したのは 15 世紀 30 年代末になってからであり、ノヴゴロドはエフフィミイ 2 世の大主教在位期間中 (1429 – 1458 年) である。Пентковский А. М. Иерусалимский устав // Православная энциклопедия. 2012. <http://www.pravenc.ru/text/293798.html> [2020 年 6 月 1 日閲覧]; Турилов А. А. Книжно-литературное творчество, книгописание. Роль Киприана во «втором южнославянском влиянии» // Православная энциклопедия. 2017.

道士らによってなされた聖書、典礼書、禁欲主義関連の著作の翻訳をルーシに広めた。また、南スラヴの聖人らの崇拜がモスクワ・ルーシで始まったのも、キプリアンの活動と関係すると思われる。さらに、府主教就任後も教会文献の書写に従事していた。キプリアンの自筆写本としては1387年にコンスタンティノーブルで書写したヨアンネス・クリマクスのスラヴ語訳『楽園の梯子』(«Лествица»)が現存する(ロシア国立図書館(モスクワ)所蔵)。その他、府主教ピョートルの伝記と彼に捧げた祈祷文および頌詞、ラドネシのセルギイとシモノフ修道院長フォードルに宛てた一連の書簡、セルプホフのヴィソツキ修道院長アファナシイによる修道院生活に関する質問への回答、ノヴゴロドヤプスコフ、府主教区の修道院に宛てた文書など、キプリアン自身の著作もある。¹⁴

キプリアンがモスクワ・ルーシにもたらしたブルガリア、セルビアの写本が執筆、書写に携わる修道士たちに言語上何らかの影響を及ぼしたことは確かだろう。しかし、キプリアン自身がロシア教会スラヴ語における文字、綴字法などの刷新に具体的にどれほどの役割を果たしたかは難しい問題であり、研究が尽くされているとは言えない。ここでは、Г. А. モリコフによる最近の研究に言及するにとどめる。¹⁵ Г. А. モリコフはキプリアンの依頼によりロシアの修道士らによってロシア教会スラヴ語に訳された『大教会聖事経』(«Евхология Великой церкви») (国立歴史博物館、シノド・コレクション、№.675、1390年代—1400年代初頭)に見られる南スラヴ語的の文字類、綴りに関して、上述の【表2】で示した M. A. ガリチェンコによる第二次南スラヴの影響期の特徴に沿って、その用法を分析した。その結果、この写本で使用されている新しい南スラヴ語的綴りは、新たな文字を導入する必要がない範囲内にとどまっており、しかもテキスト内で使用規則に矛盾が生じないよう、細部までよく練られたものであることを明らかにした。そして、この特殊な綴字法は、『大教会聖事経』の翻訳で使用されていることを鑑みるに、キプリアンとその翻訳作業チームに直接由来すると結論づけている。ただし、現時点で分析済みの同時代の写本の中に、このシノド・コレクション№.675で提唱されている新たな綴字法を完全に再現しているものは見つかっていない。この点からも、ロシア教会スラヴ語においてキプリアンが果たした役割の解明はまだ途上であり、今後の研究が待たれる。

ブルガリア出身であるキエフ府主教グリゴリー・ツァムブラクは、ブルガリア総主教エウティミイ(在位1375—93)のもとで教育を受け、ある一定の期間、アトス山で修道生活を送ったとされる。14—15世紀にスラヴの正教圏でもっとも多作かつ人気を博した著述家の一人であったが、モスクワ・ルーシに滞在したという確たる証拠はない。1406年に府

http://www.pravenc.ru/text/1684692.html#part_2 [2020年6月1日閲覧]

¹⁴ Турилов А. А. Там же.

¹⁵ Мольков Г. А. Орфографические принципы киприановского кружка (на материале рукописи ГИМ Син. 675) // Труды Института русского языка им. В. В. Виноградова. Вып. 16. Лингвистическое источниковедение и история русского языка. 2016—2017. М., 2018. С. 216—244.

主教キプリアンによりモスクワへ呼び寄せられたが、ノヴォグデルクとヴィリニウス（ヴィリノ）を通過中にキプリアンの訃報に接し、しばらくリトアニア大公国に留まった。そのあとはコンスタンティノープルに居を移している。また、グリゴリー・ツァムブラクによる府主教キプリアンへの哀悼の辞(«Слово надгробное митрополиту Киприану»)に関しては、キプリアン逝去の3年後にキエフ府主教管内でグリゴリーが読み上げたことでは研究者の意見が一致しているが、それがヴィリニウス（またはノヴォグデルク）か、キエフか、モスクワかは解決に至っていない。ただし、年代記にはこの時期にグリゴリーがモスクワを訪れたという記述はなく、より可能性が高いのはリトアニア大公国と考えられる。

グリゴリー・ツァムブラクの作品で中心をなすのは教会の祭日用の祝詞や頌詞、また説教であるが、これらはすでにその存命中にモスクワ・ルーシに伝わっていたことが、残されたほぼ同時代の写本（ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルク）、ボゴジン・コレクション、№1026）から分かる。すでに15世紀にルーシの著述家たちは自身の作品でグリゴリー・ツァムブラクの作品を、その書簡を含め、用いはじめた。なお、モルドヴァとセルビアで執筆された聖者伝、物語、祈祷文がモスクワ・ルーシに入るのはずっと遅く、15世紀末から16世紀はじめ以降である。グリゴリー・ツァムブラクはモスクワ・ルーシの写本文化に大きな影響を与えたが、それはあくまでも作品を通してであった。¹⁶

セルビア出身のパホーミイ・ロゴフェートがアトス山からノヴゴロドに到着したのはエフフィミイ2世がノヴゴロド大主教に叙任された1429年以降である。ただし、パホーミイによるヴァルラアム・フトゥインスキイ伝などがおさめられた写本（ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルク）、ソフィア・コレクション、№191）は1438年成立なので、遅くともそれ以前にはノヴゴロドで活動していたことになる。40年代はじめにはモスクワ近郊の三位一体セルギイ修道院に移り、1459年までの滞在期間中にラドネシのセルギイ伝やニコン伝など、様々な教会文献を執筆した。¹⁷パホーミイがルーシの地に足を踏み入れた15世紀30年代にはすでに、ロシア教会スラヴ語における第二次南スラヴの影響が確立し最盛期を迎えようとしており、この方面に関与するには時期が遅い。また執筆者は現在、パホーミイの自筆写本に基づいてその言語的特徴とモスクワ・ルーシでの受容を研究中だが、これまでの分析結果から、第二次南スラヴの影響によるロシア教会スラヴ語の綴字法の改変にパホーミイは関与し得ないと考えている。パホーミイは教会文献の書写にも従事したが、それも含めて、自筆写本に基づいたパホーミイの本格的な言語研究はまだ緒についたばかりとあって良い。しかしセルビア語法を非常に多く含んでいることは明らかである。¹⁸執筆者は

¹⁶ Турилов А. А. Григорий // Православная энциклопедия. 2011. <http://www.pravenc.ru/text/166685.html> [2020年6月1日閲覧]

¹⁷ Духанина А. В. Пахомий Логофет (Серб) // Православная энциклопедия (в печати).

¹⁸ См. Сперанский М. Н. Югославянские тексты «Исторической Палей» и русские ее тексты // Сперанский М. Н. Из истории русско-славянских литературных связей. М., 1960. С. 110, примеч. 20.; Јелесијевић С. О једном аутографу јероманаха Пахомија Србина. // Прилози за књижевност,

パホーミイ版『ラドネシのセルギイ伝』自筆写本（ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルク、ソフィヤ・コレクション、№1248、15世紀40年代）の言語分析を進めているが、セルビア語色が非常に強い一方、ロシア教会スラヴ語に対応させる努力も垣間見られる、複雑な言語となっている。ロシア教会スラヴ語における第二次南スラヴの影響は原則的にブルガリア語からの影響であり、セルビア語的要素はほとんどない。つまり、パホーミイがこの写本で用いている言語は、第二次南スラヴの影響で刷新された同時代のロシア教会スラヴ語とは相容れないものであり、15世紀40年代に三位一体セルギイ修道院のためにロシア人修道僧が書写した、ほぼ同一のテキストの写本（ロシア国立図書館（モスクワ）、三位一体セルギイ大修道院コレクション、№116、1443–45年）ではセルビア語法は徹底的に排除されている。パホーミイが執筆で用いている言語というのは、モスクワの修道僧にとって模倣すべき見本ではなく、修正を要するものだった。

パホーミイは中世ロシア随一の多作な著述家で、数十点の教会作品を生み出した。大公、府主教、大主教らからの依頼により聖者伝、聖歌などを執筆し、それによって報酬を得ていた、中世ルーシでは珍しい職業的な書き手と言える。パホーミイによって聖者伝および聖歌の規範が確立され、以後、ルーシの著述家たちはパホーミイの作品に倣い、己の作品の源泉として用いた。Т. Б. Карбасоваは、まさにパホーミイが、聖者伝には聖者の死後の奇跡を記載すること必須とする伝統への端緒を開いたと述べている。¹⁹パホーミイが中世ロシア教会文学に多大な影響を与えたことは確かである。

3.2 南スラヴの書物

第二次南スラヴの影響期におけるルーシへの南スラヴの書物の流入に関しては、正教会における修道規則の変移に目を配る必要がある。²⁰

正教の修道制には西方のような「修道会」がなく、修道士は一つの大きな共同体の構成

језик, историју и фолклор, књ. LXXXII, Београд, 2016. С. 38–74.; *Марујама Ю.* Фонетико-орфографичке особености језика Пахомија Логофета (на материјалу автографа житија Сергија Радонежског) // Комплексни приступ у изучавању Дрвнјег Русе, Материјали Међународне научне конференције. М., 2019. С. 128 – 130.; *Карбасова Т. Б., Левшина Ж. Л., Шибачев М. А.* Житије Варлаама Хутинског у автографу Пахомија Серба // ТОДРЛ. СПб., 2019. Т. 66. С. 171 – 196.

¹⁹ *Карбасова Т. Б.* Епифаниј Премудриј и Пахомиј Серб у раду над Житијем Сергија Радонежског // ТОДРЛ. СПб., 2017. Т. 65. С. 291 – 292.

²⁰ 以下の『ストゥディオス修道院規則』、『エルサレム修道院規則』に関する記述は、主に次の文献に依っている：*Пентковскиј А. М.* Студийски устав и уставы студийской традиции // Журнал Московской Патриархии. М., 2001. № 5. С. 69 – 80; *Он же.* Иерусалимскиј устав // Православна енциклопедија.; 都甲裕文「コンスタンティノープルのストゥディオス修道院一歴史と史料一」、『アジア文化研究所研究年報』、2016年、200(147) – 187(160)頁。

員であり、その上で特定の修道院に属していた。修道院は創建の際に、組織構成、従うべき日課、罰則などを定めた「修道院規則」(ティピコン)を設け、それは修道院ごとに異なった。とはいえ、こうした「修道院規則」は往々にして既存の文書を下敷きにしており、中でも大きな影響力を持ったのが9世紀に成立した『ストゥディオス修道院規則』である。

5世紀中葉に執政官ストゥディオスによってコンスタンティノープルに創建されたストゥディオス修道院では当初、不眠で賛美を続けるアコイメトイの規則に従っていた。799年、ヴィシニア地方のサクディオオン修道院長を勤めていたテオドシウスは一部の修道士とともに当時無人と化していたこの修道院に移籍し院長となると、サクディオオン修道院で形成された典礼方式を、都市の修道院に適合させて導入し、また古代修道院の厳格な共住制の復活を目指した。皇帝レオン5世(在位813-820年)の聖像破壊運動再開により、聖像擁護者であったテオドシウスは815年にヴィシニアに追放され、そのまま826年に逝去した。843年に聖像破壊運動が完全に終結すると、散り散りになっていた修道士たちはストゥディオス修道院に戻ったが、テオドシウスの意向を反映し、『修道院規則』が作成された。

『ストゥディオス修道院規則』は修道院生活の規則、共同食事、精進日と祭日の食事内容を定めた『規範規律文書』と、『規範奉神礼文書』の二構成である。『規範奉神礼文書』には1日の周期で行われる典礼の施行方法を定めた『ストゥディオス奉神礼の章』と、1年周期で行われる典礼の指示を集成した『ストゥディオス・シナクサリオン』がある。『ストゥディオス・シナクサリオン』は9世紀中葉から13世紀はじめにかけて新たな記念日、指示を追加しながら発展し、様々な版が生まれた。聖像破壊運動終結後のビザンツでは、すべての修道院が『ストゥディオス・シナクサリオン』由来の典礼規則を用いていた。

1034年、ストゥディオス修道院出身の総主教アレクシオス=ストゥディティス(在位1025-1043年)はコンスタンティノープルに共住制の聖母就寝修道院を創設し、『ティピコン』を作成した。総主教アレクシオスの『ティピコン』は典礼に関する部分と、修道院生活を定めた部分からなるが、前者は10世紀後半の『ストゥディオス・シナクサリオン』をほぼ変更せずに用いている。後者は『ストゥディオス修道院規則』の流れを汲む様々な文書の混交である。なお、総主教アレクシオスの『ティピコン』は、キエフの洞窟修道院長フェオドーシイ(在位1062-1074年)によって修道院に導入された。11世紀60年代末から70年代はじめにこの洞窟修道院でロシア教会スラヴ語に翻訳されるが²¹、総主教アレクシオスの『ティピコン』のギリシア語テキストが失われた現在、その内容を直接知るための唯一の資料となっている。この翻訳により『ストゥディオス修道院規則』はキエフの洞窟修道院からルーシの他の修道院に普及していった。

ストゥディオス修道院規則の伝統は早い時期にアトス山にもたらされた。アタナシオス

²¹ この翻訳がロシアの典礼・教会史研究において『ストゥディオス修道院規則』 «Студийский устав»または『ストゥディオス・アレクシオス規則』 «Студийско-Алексиевский устав»として知られている。

は 963 年の大ラヴラ創設にあたり『ティピコン』を作成する際、ストゥディオス修道院規則を指針としている。10 世紀 70 年代から 12 世紀にかけてアトス山で用いられた典礼規則は『ストゥディオス・シナクサリオン』を基にしている。この『アトス版ストゥディオス修道院規則』のギリシア語写本は現存しないが、南イタリアの一連の『ティピコン』、ゲオルギウス・ムタツミンデリの『シナクサリオン』、13 世紀のブルガリアの典礼書から、その特徴を推察できる。それによると、『アトス版ストゥディオス修道院規則』が基にしたのは『サロニカ（テッサロニキ）版ストゥディオス・シナクサリオン』である。さらにこの『ティピコン』に合わせて独自の『アトス山奉神礼の章』が作られた。

一方、11 世紀前半にパレスチナで、当地の共住制修道院の習慣に『ストゥディオス・シナクサリオン』の最初の版を適合させた『エルサレム修道規則』（別名『聖サワ修道院規則』）が現れた。その特徴は日曜日と祭日の前夜に特別な徹夜祈を行うことである。『エルサレム修道規則』の主要部分は、徹夜祈と 1 日の周期で行われる典礼を施行する順序と特性を定めた『エルサレム奉神礼の章』と、1 年の典礼のための指示を集めた『エルサレム・シナクサリオン』である。『エルサレム修道規則』も『ストゥディオス修道院規則』と同様に、各修道院の典礼の施行方法に合わせて補完、変更されていった。

『エルサレム修道規則』はパレスチナで成立後間もなく、アンティオキア主教座とコンスタンティノーブル主教座で普及した。13 世紀前半には他の典礼規則を駆逐し、ニカイア帝国（1206–1261 年）において主流となった。1261 年にニカイア帝国がコンスタンティノーブルを占領しビザンツ帝国が再建されると、コンスタンティノーブルでも『エルサレム修道規則』が導入され、各修道院、主教座教会はこれに従って典礼を執り行った。一方、アトス山でも、13 世紀を通して各修道院は『ストゥディオス修道院規則』から『エルサレム修道規則』へと移行していった。

『エルサレム修道規則』はその普及に伴い 13 世紀後半から 14 世紀前半にかけて様々な補完がなされ、また一連の新たな版も生まれた。それに付随して、コンスタンティノーブルとアトス山で新たにエルサレム修道規則に対応させた典礼書（アブラコス（典礼用福音書抜粋）、アポストル（使徒書簡および使徒行伝の典礼用抜粋）、時課経、三歌斎経など）が現れ、普及した。また『エルサレム修道規則』による典礼への移行に伴い聖歌が抜本的に変わり、13 世紀末から 14 世紀末にビザンツでは新しいタイプの聖歌の写本が成立した。15 世紀はじめには『エルサレム修道規則』はコンスタンティノーブル主教座で用いられる唯一の典礼規則となった。

こうした変化は南スラヴ正教圏にも影響を与え、14 世紀前半に『エルサレム修道規則』が教会スラヴ語に翻訳された。最初のブルガリア教会スラヴ語訳はアトス山の大ラヴラの修道僧ヨアンネスのものとする見解がある。セルビアの修道院では 1319 年にセルビアの大主教ニコディムの主導により作成されたセルビア教会スラヴ語訳（『ニコディモフ・ティピコン』）が広く普及した。その後まもなくアトス山のヒランダル修道院で新たにセルビア教会スラヴ語訳がなされ、『ロマノフ・ティピコン』として知られている。

14世紀前半にアトス山にてブルガリア修道士たちが成した典礼書の翻訳は、ブルガリア総主教であるタルノヴォのエフティミイ（在位 1375–1393 年）のもとで典礼書のテキストを編纂し確定する際の底本となった。これらの新たな典礼書がかつて用いられていたスラヴ語の典礼書に取って代わることになったが、そこには『エルサレム修道規則』の新訳も含まれる。

そして、15世紀にモスクワ・ルーシで『エルサレム修道規則』が導入されたのは上述の通りである。1401年にコンスタンティノーブルで、総主教エフティミイのもとで作成されたブルガリア語訳を底本として新たにロシア教会スラヴ語に訳され（『教会の目』«Око церковное»の名で知られる）、ロシア正教会で普及した。

こうした『ティピコン』の変更は綴字法の刷新も招いた。典礼規則の変更に伴い、アトス山ではギリシア語の聖書のテキストや典礼書が全面的に見直され、ギリシア語の正書法が古代の伝統に則って修正、変更された。その影響はアトス山にあるスラヴ系の修道院にもおよび、14世紀中葉に古い手本にならって教会テキストの修正がなされ、同時に綴りが人為的に古風化された。そこで生まれたブルガリア語の新たな綴字法は、ブルガリアにおいて総主教エフティミイのもと体系化され、厳密に規定された。そしてセルビア語の綴字法にも影響を与えた。²²

モスクワ・ルーシにおける第二次南スラヴの影響の諸現象のなかで最も早いのは、13世紀後半から15世紀前半にかけて行われた南スラヴ語への翻訳テキストの流入である。『ストゥディオス修道院規則』から『エルサレム修道規則』への移行が直接的、間接的にこれらのテキストを必要とさせ、また14世紀に創建された新しい共住制修道院は禁欲主義関係の文献と修道院生活の指南書を求めた。²³つまり、新たな書物の流入は宗教的な目的によるものだった。ただし、16世紀以前にモスクワ・ルーシにもたらされ、今日まで残っている南スラヴの写本はそれほど多くない。A. A. トゥリーロフはブルガリアの写本を13点、セルビアの写本を5点挙げている。²⁴Д. М. ブラーニンは、その数え方には不備があり、実際はもっと少ないと指摘している。²⁵いずれにしても第二次南スラヴの影響期にモスクワ・ルーシに流入した南スラヴ写本で現存するものは非常に少なく、また原本の南スラヴ写本とそこから書写したルーシの写本がセットで残っている例はほぼ皆無で、ルーシの筆写者たちが当初南スラヴの言語をどのように受け止めたかを直接的に検証するのは困難であり、ルーシの修道士たちが作成した写本を多数比較・検討して解明を試みるしかない。ただし、ルーシの筆写者が南スラヴの新たな写本の言語を即座に、機械的に真似たわけではないこと

²² Мошин В. А. Палеографическо-орфографические нормы южнославянских рукописей // Методическое пособие по описанию славяно-русских рукописей для Сводного каталога рукописей, хранящихся в СССР. Вып. I. М., 1973. С. 66–68.

²³ Турилов А. А. Восточнославянская книжная культура ... С. 241.

²⁴ Турилов А. А. Там же. С. 260–264.

²⁵ Буланин Д. М. К изучению механизмов «второго южнославянского влияния» на русскую письменность // Палеороссия. Древняя Русь: во времени, в личностях, в идеях. 2018. №2 (10). С. 144.

は確かである。南スラヴからの書物の流入とロシア教会スラヴ語の新たな綴字法の普及にはタイムラグがある。15世紀30年代から40年代には、南スラヴからの新たなテキストの流入は途絶えるが²⁶、それまでにルーシの著述家、筆写者らは南スラヴの写本の綴字法を自らの内で消化し、ロシア教会スラヴ語に適用させた。その後、新たな綴字法がさらに広く用いられるようになるのであった。

おわりに

14世紀末から15世紀にモスクワ・ルーシで生じた第二次南スラヴの影響は極めて多面的であり、その背景、要因も複合的である。本稿ではロシア教会スラヴ語に生じた第二次南スラヴの影響の中でも、最も顕著である使用文字と綴字法の変化を紹介した。しかし、あくまでも18世紀以降の文字改革への理解を助ける範囲に留まっており、現象の一部に言及した過ぎない。さらに、第二次南スラヴの影響による新たな文字使用、字体、綴字法がすべての写本で統一されていたわけではなく、加えて、それ以前の時期に形成された伝統的な方式に倣う筆写者も、その数は減少していくものの、存在していた。本稿で扱った言語現象は、時代の動向全体のごく一部ということになる。

また、第二次南スラヴの影響の発生要因と背景に関しても、この問題を扱うための、基本となる前提を紹介したに過ぎない。

第二次南スラヴの影響期にあたる14世紀末から15世紀は、言語、文化、宗教面だけを考えても大変複雑な時代である。そしてこの時代に起きた現象は、新たな時代を迎え、構築していくための模索であり、その模索はのちの時代にも確かに影響を与えたのであった。

²⁶ Турилов А. А. Там же. С. 247.

Второе южнославянское влияние на Московской Руси в конце XIV – XV вв.

– В свете реформы русского письма в XVIII – начале XX вв. –

Юкико Маруяма

В XVIII – начале XX вв. в России проводились реформы азбуки и правописания. Первая реформа русского гражданского письма была осуществлена Петром I в 1708 – 1710 гг., в результате чего были исключены надстрочные знаки, «пси», «кси», «омега», «от», «юсь», в 1735 г. распоряжением Академии наук - «зело», «ижица», «кси», реформой 1917 – 1918 гг. - «фита», «ять», «І». После этого начинается история современного русского письма.

Следует отметить, что не все вышеназванные буквы последовательно использовались на протяжении всей истории древнерусского языка. Большинство из них фактически вышло из употребления ко второй половине XIV в. На протяжении конца XIV и XV столетий в древнерусской книжной культуре произошла совокупность изменений, которую принято называть «вторым южнославянским влиянием». Самой яркой инновацией в церковнославянском языке данного периода являются графико-орфографические изменения, в связи с которыми восстановилось употребление вышеуказанных букв, появились новые надстрочные знаки. Для того чтобы глубоко понять нужность реформ азбуки в XVIII – начале XX вв., необходимо обратиться к языковым и культурным феноменам периода «второго южнославянского влияния».

До сих пор в Японии, хотя в нескольких книгах и используется термин «второе южнославянское влияние», подробное описание его проявления отсутствует. В данной статье, на основе научных работ М. Г. Гальченко и Б. А. Успенского, описываются графико-орфографические признаки второго южнославянского влияния, которые необходимы для понимания истории реформ азбуки, начиная с XVIII в. Кроме того, на основе мнений ряда филологов, глубоко изучающих «второе южнославянское влияние», отмечается, что не стоит преувеличивать роль южнославянских выходцев, как это принято в Японии.

Среди различных аспектов «второго южнославянского влияния» несомненно важным является распространение в восточнославянской письменности новых переводов, выполненных южнославянскими книжниками на протяжении второй половины XIII – первой половины XV вв. Как отмечает А. А. Турилов, это связано с заменой в церковной практике Студийского устава Иерусалимским. В статье коротко описывается история данных церковных уставов в Константинополе, Афоне, Болгарии, Сербии и на Руси.